

< 日本宗教学会第 65 回学術大会 パネル企画 >

「他性と媒介 京都学派とフランス哲学」

はじめに

以下に掲載するのは、2006 年 9 月、東北大学にて開催された日本宗教学会第 65 回学術大会において企画されたパネル「他性と媒介 京都学派とフランス哲学」(17 日 4 部会 14:00 ~ 16:00 代表者 佐藤啓介)の報告である。

パネル名からも分かるとおり、本パネルは、京都学派(ないし、そこに属すると目される思想)とフランス哲学との関係を問うという従来あまりなされてこなかった研究を、パネルとしてまとまった形で遂行したものである。本パネルの概要や、当日の様子については、すでに『宗教研究』誌上にアブストラクトによって報告がされているが¹、学術発表が要約によって形式的に発表されるだけでは、こうした試みの意義は十分には伝わらない。そこで、本紀要の場を借りて、その報告をさせていただこうと考えた次第である。

当日のパネルは、以下の参加者・発表順によって構成された(所属は 2006 年 9 月当時のもの)。

種的社会の展開 田辺元とフランス社会思想	伊原木 大祐(日本学術振興会)
否定する愛 田辺・波多野・マリオンと存在愛論	佐藤 啓介(京大)
ベルグソンと西田	片柳 榮一(京大)
時間と他者 レヴィナスと波多野の比較考察	山口 尚(大阪工業大)
コメンテーター	松丸 壽雄(獨協大)
司会	川口 茂雄(東大)

以下でも、この順番に沿って、各論文を配置している。なお、学会当日は松丸壽雄氏から非常に鋭く、有益なコメントを寄せていただいた。そのコメントの核心は、「本パネルで扱われたフランス哲学の他者論、しかも絶対他者(ないし他者の絶対性)を想定した他者論が、京都学派、とりわけ自他や主体客体の区別を根底において包含する絶対無の思想とどこまで接点を有しうるのか、現時点では両者の差異のみが際立ったに留まるのではないか」という疑問にあった。こうした疑問点は、京都学派とフランス哲学という関係を考える上で、決定的な意味を有しているのではないかと思われる。

また、当日のパネル司会を務めていただいた川口茂雄氏には、このパネルが全体としてどのような訴えを内包していたのか(あるいは、どのような訴えを引き出しうるか)近年の日本史思想史研究の状況を踏まえた視点を記していただいた。京都学派がフランス哲学と出会い、それと格闘した「現場」がどのようなものであり、その現場を、本パネルの各パネリストがどのような眼差しで捉えようとしていたのかを、短慮浅見

な企画者に代わって（パネリストの意図以上に）的確に説明していただいた。

さて、松丸氏のコメントを通していささか先取りした形になったが、以下では、本パネルがどのような主旨によって企画され、また、どのような問題意識をもって各自が発表を準備したのか、簡単に説明させていただきたい。

パネルの主旨

従来、京都学派の諸哲学者は、ドイツ哲学ならびに禅仏教思想との関係が重視され、その中で研究が進められてきた。本パネルは、そうした状況においていわば 他者 とも言えるフランス哲学との関係を設定することで、異なる視点を提供することを主旨とする。京都学派とフランス哲学というテーマを設定した場合、直ちに想起されるのが九鬼周造とフランス哲学の関わりであるうし²、実際、その関係については近年、研究が刊行されつつある。そこで本パネルでは、むしろこれまであまりフランス哲学との関係が注目されてこなかった思想家を積極的に取り上げてみたい。

だが、本パネルの視点は二重であることを予め申し上げておこう。第一の視点は歴史的視点、思想史的視点である。つまり、京都学派の諸思想の形成において、フランス哲学が重要かつ媒介的な役割を果たしていることを、例証することである。伊原木発表では田辺哲学の形成におけるフランス社会思想の役割、片柳発表では西田哲学形成におけるベルグソンの役割がそれぞれ例証されることになるはずである。

第二の視点は、現代フランスの諸思想、特にその他者論的転回以後とも言える思想と京都学派のそれとを比較することで、京都学派を世界的地平において捉え、かつ歴史的に相対化することで、その新たな意義を明らかにすることである。佐藤発表では田辺・波多野・マリオンを存在論と愛論を地平として比較し、山口発表では波多野とレヴィナスを時間論と他者論を地平として比較することになる。

無論、本パネルは、このような歴史軸をまたぐ二つの視点を設定するからといって、歴史を超えて一貫した「フランス哲学的なもの」や「フランス哲学の本質」なるものを直ちに想定しているわけではないし、いわんや、「フランス哲学とは何か」といった問いを立てようとしているわけでもない。同時に、「京都学派」というラベリングをおこなうからといって、本来は西田と田辺を中心としつつ、個々の独立した思想家同士の間で緩やかなネットワークであったものに³、何か一つの統一した思想、通底する本質のようなものを設定しているわけでもない。京都学派、フランス哲学双方の本質を予め措定して、その両者を比較するのではない。たとえば田辺と波多野のように、個々単独で見ればそれぞれ独自で関係の薄いように思える思想家であるが、彼らをフランス哲学という他者とのコンステレーションに置き、それを媒介とすることによって、京都学派と括られる中で従来見えてこなかった結節点を見出していく作業。それと対応して、フランス哲学という括りの中で見えてこなかった結節点を、京都学派という他者の媒介を通じて探っていく作業。単なる比較研究や受容史的研究ではなく、そうした相互媒介かつ相互相対化の作業が、本パネル「他性と媒介 京都学派とフランス哲学」の主眼である。欲をいえば、さらにその相互媒介の背後に、京都学派とフランス哲学の双方に否定しがたい影響を与えているドイツ哲学を媒介の第三項として透かし見ることができればと考えてい

るのだが。

さて、もう一つ本パネルの主旨を述べると、発表の多くが宗教的言説に触れていることからもうかがえるように、このパネルは全体としてみた場合、個々の思想家に片鱗を覗かせるユダヤ的なもの、キリスト教的なもの、禅仏教的なもの、さらには宗教学的なものの相互媒介でもある。しかも、必ずしも京都学派の思想家の側を「禅仏教」に代表させているわけではない点に留意していただければ幸いである。京都学派の思想のうちには、それ自体として複数の由来 哲学的由来、宗教的由来、文化的由来、ディシプリンの由来が混在しているのである。

こうした 異他なる思想の相互媒介 の試み、しかも、あくまで媒介であって「同一化」でも「差異化」でもない二項対立の間隙を縫うような試みは、グローカリゼーションのように、グローバルな現代において今まさに起こっている様々な両義的社会事象の小さな縮図といえるかもしれない。しかも、その事象の片方の極であるグローバリゼーションの実態が世界総アメリカ化であると同時に、世界総ヨーロッパ化であることを考えるならば、本パネルがフランス哲学を一つの他性として設定した意味もまた、よりご理解いただけるのではなからうか。

パネル代表者として 佐藤 啓介

¹ 『宗教研究』第351号（第65回学術大会紀要特集）、日本宗教学会、2007.3.

² 九鬼とフランス哲学の関係については、以下を参照。岩田文昭、「九鬼とフランス哲学」『九鬼周造の世界』（坂部恵・藤田正勝・鷲田清一 編）、ミネルヴァ書房、2002.

³ このような形で京都学派を捉える視点については、以下から学んだものである。竹田篤司、『物語「京都学派」』、中公叢書、2001.